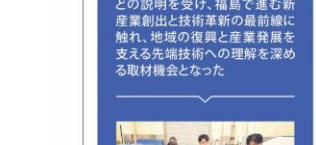

媒体名	福島民報	版／面	第　版／　13 面	掲載日	2026 年 3 月 8 日（日）

東日本大震災15年 日英版震災復興新聞『福島とともに』座談会

神田外語大学

神田外語大“学生記者”福島の震災復興を新聞に

東日本大震災・東京電力福島第1原発事故から15年が経過した福島県の被災地を、神田外語大学の学生が訪れた。学生たちは新たな産業基盤の構築を目指す国家プロジェクト「福島イノベーション・コースト構想」について学んだほか、さまざまな施設や企業を訪問して福島県の過去、現在、そして未来への展望を自らの目で見て、声を聴いた。取材した内容を「日英版震災復興新聞『福島とともに』」としてまとめ、内堀雅雄知事に贈ったほか、広く国内外に発信する。贈呈式のあと、学生と知事の座談会が行われ、福島の今と未来を語り合った。

▶英語版

FUKUSHIMA

Fukushima: A Hub of Recovery,Innovation, and Renewable Energy

▶日本語版

福島とともに

未来創る英知と覚悟

神田外語大生が制作した復興新聞「福島とともに」

復興新聞を読む

前列は内堀知事を中央に座談会登壇者7名と後列に神田外語大柴田ゼミの学生オブザーバー9名

神田外語大学 柴田ゼミ
ゼミ長
関口 椋久さん

神田外語大学 柴田ゼミ
浜風祭・ビール制作リーダー
関口 舜矢さん

神田外語大学 柴田ゼミ
英字新聞リーダー
長田 紬さん

福島県
知事
内堀 雅雄氏

神田外語グループ
理事長
佐野 元泰氏

神田外語大学
教授
柴田 真一氏

ファシリテーター
福島民報社 代表取締役社長
芳見 弘一氏

福島の印象と「二つの風」

芳見 はじめに、プロジェクト参加前に皆さんが抱いていた福島の印象についてお聞かせください。

関口（椋） 正直なところ、福島については、東日本大震災の被災地という印象が漠然と頭にある程度でした。ニュースで耳にすることはあっても、地域の暮らしや文化について深く考える機会はほとんどありませんでした。

関口（舜） 私も同じような印象です。福島県が大きな被害を受けたという認識はありましたが、どこか遠い存在でした。震災から15年がたっているので、もう復興は進んでいるのだろうなという思い込みもありました。

長田 私もニュースや学校の防災教育で知る機会はありましたが、そこからさらに福島について積極的に知ろうとはしてきませんでした。無意識のうちに「関係のない場所」と、見えない線を引いてしまっていたのではないかと思います。

芳見 皆さんにとって福島は、どこか遠い印象があったようですね。内堀知事には、福島に今なお影響を与え続けている「二つの風」、そして今回のプロジェクトに期待されていることを伺います。

内堀 「二つの風」とは風評と風化です。風評は原発事故への「極端な関心」から起き、風化は「無関心」から起きます。東日本大震災から15年となる今の福島は、風評がある一方で、風化が静かに進んでいるという複雑な状況にあります。

そこで大事なのが、第3の風となる「しあわせの風ふくしま」です。これは昨年から始めた福島県の観光キャンペーンのキャッチコピーなのですが、今回、皆さんが取り組んでいただいたプロジェクトはまさにこの「しあわせの風」です。福島に来て、見て、話を聞いて、感じて、発信していただく。とてもいい風を吹かせていただいたと感謝しています。

福島を実際に訪れて変わったこと

芳見 今回のプロジェクトで福島を訪れて、皆さんの中でどのような変化がありましたか。

関口（椋） 私は福島イノベーション・コースト構想や新産業の現場を取材させていただきました。被災地という印象からのスタートだったので、どういう気持ちで取り組むか、考えながらの取材でした。しかし実際にお会いしてみると、どの企業の方もすごく楽しそうに話してくれました。話を聞いていく中で、福島は被災地というより、新しいことに挑戦し続けている場所なのかなと感じるようになりました。

関口（舜） 私は特産品をテーマに取材し、広野町振興公社のバナナ、ネクサスファームおおくまのイチゴなど新たな技術で生産している農産物や、伝統的な常磐ものなどを実際にいただき、お話を聞きました。どれもとてもおいしくて、お話からは生産者の皆さんの強い思いを感じました。その思いを反映させたいと取り組んだのが、バナナを使ったビールの開発です。

広野町振興公社で開発栽培したバナナを使ったビール。爽やかなのど越しが特徴

長田 私は福島県出身の友人がいるのですが、彼女を悲しませてしまったらどうしようとの思いから、今まではあまり福島を話題にしてきませんでした。今回、実際に福島を訪れて、皆さんが前を向き、新しい技術の拠点もあることを知りました。帰京して友人に「福島に行ってきたよ」と話題にすることができ、新たなコミュニケーションが生まれたと感じています。私の経験は小さいですが、このようなことが積み重なって、多くの人に明るい経験や知識が広まればいいなと思います。

芳見 柴田先生は学生さんの変化を間近でご覧になってきたと思いますが、いかがでしょうか。

柴田 端的にいうと二つあると思います。一つは人と関わることの責任、二つめは言葉の重みです。これを実感したのではないかと思っています。フィールドワークに行く前、学生はどんなふうに質問したらいいのか、いろいろ迷っていました。直接話を聞き、思いに触れ、その気持ちに寄り添っていくというプロセスを経て、それをどう伝えればいいのかという言葉の重みを感じたのではないかと思います。福島という地域に関わることで、一人一人が成長し、多くの学びを得ました。この経験は今後、社会に出ても生きてくると思います。

芳見 復興は人がつなぐという視点で、今の学生さんたちのお話を聞いて内堀知事は若い世代にどのようなことを期待されるでしょうか。

内堀 福島に来る前の印象、そして来てからの変化を生き生きと話してくれる学生さんを見て、成長の伸びしろがすごいなと心強く思いました。今、世界を見ると自分ファースト、自国ファーストの考えが席巻していますが、東日本大震災と原発事故以降、福島県は全国、世界の皆さんから温かい応援をいただいてきました。国内外からの応援が15年間続いていなかったら、私たちの頑張りは続かなかったと思います。世界で分断と対立がある一方で、つながろうとしている人がいるということです。

そこで大事にしてほしいのが三つの「ちょう」です。尊重、傾聴、協調です。相手をリスペクトし、耳を傾け、違いを理解しあって一緒にできることをやってみる。今回皆さんが制作してくれた新聞もビールも、この三つの「ちょう」が全て詰め込まれていると感じました。

新聞制作の苦労と発信へ込めた思い

芳見 「福島とともに」という素晴らしい新聞が完成しましたが、作る上でどのようなことに苦労しましたか。

関口（椋） 私が新聞制作で苦労した点は字数制限です。いろいろな方を取材して得られた情報や、人の思いがたくさんあって、それを限られた文字数で表現するのが難しかったです。また「何を伝えるか」だけでなく「どういう立場で伝えるか」を常に考えていました。福島を外から見て評価するような書き方にならないよう、自分たちも同じ時間を生きる一人として真摯に向き合うことを心がけました。

関口（舜） 新聞制作を通して「発信する側の責任」を強く意識するようになりました。私たちが作った新聞を読むのは、世代も、住んでいる地域も違う方々です。コミュニティが違えば常識も違ってきますので、誤解を与えてしまうような表現にならないよう注意しました。また、実際に震災を経験された方の中には、「県外から来た学生がわかったような顔をして何を書いてるんだ」と思う方もいるかもしれないと思い、そこは特に気を使いました。

福島県の現状と復興について内堀知事と学生3名が熱く語り合った

長田 私は英字新聞を担当しました。日本語の新聞と比べて伝えられる量が少なくなってしまうため、どこを伝えて、どこを今回は伝えないかという取捨選択が特に苦労した点です。また、課題や難しさはあるものの、それ以上に、前を向いて挑戦を続けている人たちの姿に強い光を感じました。英字新聞においても、世界の人にそれが伝わるようにという気持ちで制作しました。

芳見 この新聞を、どんな思いを込めて国内外へ発信していきたいとお考えですか。

関口（椋） 私たちは常に語学を学び、異文化を学びながら成長しています。福島では復興という言葉の裏にある試行錯誤や迷い、それでも前に進もうとする強い意思を感じました。それを国内外へ伝えることで、福島を被災地という特別な場所としてではなく、挑戦を続けている場所として捉え直すきっかけになればうれしいです。

関口（舜） 特産品や商品の紹介にとどまらず、その背景にある人々の思いや、地域の選択が読む人に伝わればいいなと思っています。特に広野町振興公社の方々とお話しする中で、バナナ栽培が単なる新しい取り組みではなく、町の未来を見据えた挑戦であることを知りました。新聞を通して、そのような熱い思いを発信していきたいです。

長田 私は英字新聞のエディターズノートを書かせていただきました。海外には、福島に対する固定的なイメージや不安が今も残っていると感じています。だからこそ、実際に福島を訪れて聞いた言葉や、感じた空気感が読む人に届くよう言葉を選びました。福島をどう説明するかではなく、福島で生きる人たちの「今」をどう伝えるかに重心を置いて制作したこの英字新聞が、福島を一面的ではなく、チャレンジの地として知ってもらえる入り口になればと思っています。

海外発信がもたらす福島への可能性

芳見 内堀知事、海外発信が福島にどんな可能性をもたらすのか、その意義についてお伺いします。

内堀 私は今、ローマ字の「FUKUSHIMA」の定義を変えたいと思っています。日本語の「福島」「ふくしま」は、風評は残っているものの、この15年で復興が進んでいることを概ね感じていただいていると思います。一方でローマ字の「FUKUSHIMA」は、ネガティブなイメージのまま時計の針が15年前で止まっているんですね。これをどうひっくり返してポジティブに変えていくか。それが定義を変えることだと思います。そのためには、この英字新聞のような形でまっすぐ海外へ届けることには素晴らしい効果があると思います。あとはインバウンドですね。今、福島には震災前の3・3倍の方が海外から訪れています。来て、見て、食べて、感じていただくことが何よりも重要です。そういう意味でも、この新聞が福島を訪れるきっかけとなることに大いに期待しています。

今年、福島は県制150周年を迎えます。皆さんとともに「しあわせの風」を起こし、さらに復興を前へ進めていきます。

芳見 我々も福島に根ざす新聞社として、今後も真摯に発信を続けていきます。神田外語大学の皆さん、ありがとうございました。

「言葉」を通した実践的な学びに大きな意義

神田外語グループ 理事長 **佐野 元泰**氏

本学は「言葉は世界をつなぐ平和の礎」を建学の理念とし、世界の架け橋となる人材の育成を目指しています。言葉を学ぶということは、翻訳ができることにとどまらず、相手の文化や背景を踏まえ、どうすれば思いが届くかを考えながら言葉を選び、発信する力を身につけることです。今回はまさにその力が実践的に問われていたと思います。学生たちは福島で人と出会い、簡単には言葉にできない思いや複雑な現実に向き合いました。そこで得たのは「どう理解し、どう伝えていくか」という問いだったのではないでしょうか。

その問いを抱え続ける姿勢こそが、これから社会に出て、世界の人と関わっていく上でとても大切な力になると思います。

福島でこのような機会を与えていただき、学生たちにとってかけがえのない経験になったと思います。海外では今も、福島の15年前のイメージだけが一人歩きしている場面があります。学生たちが福島の「今」を自分たちの言葉で受けとめ、日本語のみならず英語という言語を通して、世界に向けて丁寧に伝えていくことに大きな意義があると考えています。

福島の新聞社として確かな光を発信

福島民報社 代表取締役社長 **芳見 弘一**氏

福島県に根ざす地方紙として、本紙は東日本大震災・原子力災害の発生当初からこれまで、福島の復興への歩みを伝え続けてきました。復興を伝えるということは、出来事を早く、広く届けるだけではありません。その土地で何が起き、どんな思いや葛藤、そして挑戦があるのかを時間をかけてすくい上げ、社会に残していくことが大切だと私たちは考えています。

福島は日本の地方社会が抱えるあらゆる課題の先進地だと言われています。見方を変えれば、福島はそれらの課題に最初に挑戦する始まりの地です。自治体、大学、企業、さまざまな方々とスクラムを組み、課題先進県が幸福先進県となれるよう未来を拓いていきます。

メディアは地域と世界を結ぶ橋渡しの役目を担っています。今回のプロジェクトで学生の皆さんが現地に足を運び、人の声に耳を傾け、どうすれば思いが届くかを考えながら言葉を選んできた姿勢は、新聞づくりの原点と重なるものだと感じました。今後も私たちは皆さんとともに、福島で続く挑戦や、その中にある確かな光を、誠実に、丁寧に発信していきます。

■復興新聞「福島とともに」制作時の取材先

1日目

- 東日本大震災・原子力災害伝承館〈双葉町〉
- 双葉町産業交流センター〈双葉町〉
- 震災遺構・浪江町立請戸小学校〈浪江町〉
- JR双葉駅前〈双葉町〉
- 中間貯蔵事業情報センター（CREVAおおくま）〈大熊町〉
- Jヴィレッジ〈楢葉町・広野町〉

2日目

A班
- 福島水素エネルギー研究フィールド〈浪江町〉
- 福島ロボットテストフィールド〈南相馬市〉
- 道の駅なみえ〈浪江町〉
- 會澤高圧コンクリート福島RDMセンター〈浪江町〉
- 福島国際研究教育機構（F-REI）〈浪江町〉

B班
- トロピカルフルーツミュージアム〈広野町〉
- ネクサスファームおおくま〈大熊町〉
- 商業施設クマSUNテラス〈大熊町〉
- 柴栄水産〈浪江町〉

C班
- ふくしま12市町村移住支援センター〈富岡町〉
- 福島しろはとファーム〈楢葉町〉
- 商業施設クマSUNテラス〈大熊町〉
- 大熊インキュベーションセンター〈大熊町〉
- 浅野撚糸双葉事業所〈双葉町〉

復興新聞の制作過程

會澤高圧コンクリート福島RDMセンター

学生たちは會澤副社長から空飛ぶコンクリート3Dプリンターなどの説明を受け、福島で進む新産業創出と技術革新の最前線に触れ、地域の復興と産業発展を支える先端技術への理解を深める取材機会となった

柴栄水産

学生たちは柴栄水産の柴強代表の話に真剣に耳を傾け、積極的に質問を重ねながら、震災後にゼロから事業を再建してきた歩みを丁寧に聞き取り、地域産業を支える現場の努力と課題への理解を深めた

新聞制作

福島民報社記者の指導のもと、学生が新聞制作に取り組み、記事構成やタイトル・リード作成、限られた文字数で情報を伝える難しさを実感し、社会に向けて正確に発信する責任を学んだ

学園祭・浜風祭（よってがっしょ福島）

学生たちは浜風祭で「よってがっしょ福島」を出店し、福島特産品の販売を通じて来場者に地域の魅力や復興の現状を伝え、現地で得た学びを社会へ還元する活動に主体的に取り組んだ

主催／神田外語グループ　特別協力／福島民報社　後援／復興庁・福島県・城南信用金庫
協力／公益財団法人福島県観光物産交流協会・共同通信社・毎日新聞出版株式会社・株式会社大鵬・株式会社広野町振興公社

お問い合わせ
学校法人佐野学園 神田外語グループ 法人本部
グループコミュニケーション部
Tel▸03-3258-5837　E-mail▸media@kandagaigo.ac.jp

※無断で複製・転載することを禁じます